

conversation' とは何かということについて論じている。本研究では、30分の初対面会話の後に「フォローアップ・インタビュー」と称して、会話参加者に以下のような質問をした。

「直前の会話の感想」「他の参加者の印象」「普段会話でこころがけていることは何か」「やりやすい会話とやりにくい会話はあるか」という共通の質問である。

初対面会話で気をつけることとして、英語圏の参加者は「互いの能力を見せ合う場」ととらえていることがわかった。それを詳しく言うと、「どれだけ知識があるか」「説明が上手いか」「相手の話に対して質問ができるか」という点が能力の見せ所となるようである。一方、日本語の参加者の回答からは、共通した回答は出てこなかった。「相手の話をよく聞く」「話の腰を折らないで聞く」「相手が居心地よくなるように気をつける」などの意見が回答されたことから、彼らが相手に気をつかった会話をこころがけていることがわかる。

また、英語圏の話者にとっては、参加者全員が平等に話すというのが望ましい会話であることが回答で示されている。三人組の会話の中では、二人の参加者が多く発言している場合は、残りの一人が会話に参加できるようその二人が配慮をするということである。一方、日本語話者は参加者の会話へ平等な参与にはこだわらず、一人の参加者だけが話しているケースが観察された。自分は聞いている方が好きであるとか、話す方が好きであるという類型化が行われているからである。日本人は他者に気を配る傾向があるため、会話のターンも平等に分配すると思いきや、意外に個人プレーが許されるものだと感じた。こういった傾向は、評者の過去の実験においても観察されることがあった。かつて、評者は日本人グループを複数結成して会話を収録したことがあったのだが、饒舌な参加者やイニシアチブを取るタイプの参加者が会話のフロアを独占する傾向が見られた。

2-4 4章 日・英語初対面会話における自己開示の機能

自己開示はもともと、言語学ではなく心理学で研究されてきたテーマである。臨床心理学者の Jourard(1971)は、自己開示を個人的な情報を他者に知らせる行為(act of revealing personal information to others)と定義した。評者が日常生活で感じる印象としては、初対面会話において日本人はあまり自分自身について深くは語らず、当たり障りのないことだけを話している気がする。評者自身も日本人であり、やはり初対面の相手に対して自分のことを詳しく話すのに抵抗があるし、相手に自分についての踏み込んだ質問をされるとあまりいい気分がしない。おそらく多くの日本人が同じような感情を持っているのではないだろうか。一方、英語圏の人々は自分自身について我々よりもざっばらんに話している印象がある(もちろんこれには個人差があることは言うまでもないが)。これが単なる評者の印象ではなく、日本語話者と英語話者の言語行動の相違であることが著者の分析によっていくらか証明された。著者は、東京、テキサス、イギリス、オーストラリアの各地で3人組の会話を5本収録した。合計20本、参加者数の合計は60人という大掛かりな実験である。会話

において、参加者がどのような自己開示を行っているかを話し手の言語行動、聞き手の言語行動、話し手と聞き手の協同作業としての言語行動という観点から分析した。

分析対象となった英語母語話者と日本語母語話者の顔触れは前章同様、日本、アメリカ、イギリス、そしてオーストラリアの会話参加者である。本章では、形態的特徴を持つ疑問文だけでなく、他の参加者にはたらきかけて応答を求める発話も分析対象にしている。なんらかの応答を求める発話を応答要求発話と呼んでいる。実験データから抽出した応答要求発話を、著者は7種類に分類した。

2-5 5章 日・英語の男性初対面母語会話に見られる応答要求発話—応答の連鎖—

- (1) 真偽疑問文
情報の真偽の判断を被質問者から引き出す疑問文
- (2) 補充疑問文
英語では疑問詞を補うもの、日本語では英語の疑問詞に相当する語が含まれているもの
- (3) 選択疑問文
提示した複数の選択肢の中から当てはまる回答を選択させる疑問文 (例: A or B)
- (4) 付加疑問文または同等の働きを持つ文
- (5) 順番配布を主眼とした疑問文
質問者がそれまでの会話の内容を受け、被質問者からも同様の情報を求める際に用いられる。(例: What about you?)
- (6) ニュースマークス
初めて聞いた情報に対して驚きや興味を示す短い表現である。(例: Really?)
- (7) ほのめかし応答要求発話
会話参加者間に認識論的非対称性がある場合、他の参加者に明示的に情報を求めて質問するのではなく、質問者自身にその知識が欠けていることだけを述べる。(例: I have no idea.)

本章では表が5つとグラフが8つも使われ、それらは視覚的に数値を把握する資料であるのに有効な資料となっている。それらの資料は、国別のグラフと全参加グループのグラフを使用し、それぞれが7種類の疑問文をどの程度使用していたかを表している。非常に詳細な分析であると言える。各国の分析データを比較すると、いずれの国も真偽疑問文を使うことが多い。日本語では他のグループと比べ、補充疑問文の出現が少なく、応答要求発話の出現も比較的少ない。国別のグラフとグループごとのグラフで、7種類の疑問文の使用比率を説明する、詳細なデータ資料となっている。情報を求める性質を持つ応答要求発話についても、日本語話者の使用頻度は比較的 low、使用頻度第三位のイギリスと比べると10%以上の差がある(英: 28%、日: 15%)。日本語会話では、同意を求めたり、相手の話を自分が理解できているかを確認したりすることを重視したやりとりが行われていた。

2-6 6章 日・英語の他者修復—母語話者間会話と異文化間会話の比較—

話者の中で聞き損ないや言い間違いが発生した時に用いられるのが「他者修復」である。本章では日本語話者と英語話者の他者修復を比較し、両者の用法の相違点を検証している。初めに母語話者間の他者修復のパターンを対照分析し、その次に異文化間のそれを分析する。Hayashi and Hayano(2013)は、話者間の発言に修復の必要性が生じた場合、聞き手の理解の強さと弱さの段階に従って他者修復の形式を以下の5段階に分類している(p.137)。

(1) Open-class:

聞き手が相手の発言をまったく聞き取れないか理解できない場合に用いられる。(例: “Pardon?” “huh?” など)

(2) Q-word:

相手の発言の部分的に不明な点について、“Who did you see?” “Where?” など特定の疑問詞を含む疑問文あるいは疑問詞のみ用いて情報を求める。

(3) Repeat + Q-word:

聞き取れた部分に一部聞き取り不明な部分がある場合に “They're what?” “Met whom?” など話し手の発言の部分的繰り返しと疑問詞を使用し、理解できなかった部分の情報を得る。

(4) Repeat:

聞き取られた際も自分の内容理解や聞き取りに不確かな点がある場合、不明点を明らかにするために発する疑問文(例: Twelve minutes?)

(5) Understanding check:

聞き手が相手の発言内容をある程度理解している場合、それを確認するために用いる表現 (例: That's your daughter.)

なお、聞き手の理解度は(1)が最低レベルで、番号が大きくなるのに比例して度合いが高まる。すなわち、(5)が最も理解度が高いということになる。

母語話者間の他者修復については、日本語会話は英語会話の約三倍である。その理由として、著者は両グループの話題の展開法が異なるせいであると分析している。相手の発言を確認し話題の展開を相手に任せる方が新しい質問をして自分が話題の展開により積極的に関与するよりも負担が少なく、日本語話者の話題の展開のスタイルに合うものであると著者は考えている。英語話者は会話により情報を得、相手の意見を求める傾向を、日本語話者は相手の発言を確認しながら会話をすすめようとする会話のスタイルが他者修復にも表れているといえよう。

一方、異文化間会話において、非母語話者にとって他者修復は会話の内容を正確に理解するための重要なストラテジーである。Ozaki(1989)の先行研究では、異文化間英語会話で日本語話者はフェイスにかかる負担を考慮し、他者修復を控えると論じている。しかしながら、本研究ではOzakiの研究と

は異なる結果(異文化間英語会話で日本語話者が他者修復を控える傾向は特になかった)が出たのが興味深い。

2-7 7章 日・英語の初対面会話におけるあいづち

1980年代よりあいづちは多くの言語研究者によって取り上げられ、研究題材とされてきた。水谷(1993)によると、日本人は相手に気を使った「共話的」な会話をする論じられている(「共話」とは水谷の造語である)。日本人の言語行動の特徴は、聞き手が話し手の発言にあいづちなどを打ったりして、協調的な会話を展開する傾向が強いとされる。また、メイナード(1992)によると、日本語による会話の特徴は円滑に会話をするために聞き手に対して頻繁なあいづちを打つことである。日本人はアメリカ人の約2倍あいづちを打つと言われている。Maynard(1997)によると、日本語話者は頻繁にあいづちを打つことによって、聞き手の話に興味を示していることを表明する。それとは対照的に、英語話者は会話の中であまりにも頻繁なあいづちを受けるとうっとうしく感じる傾向がある。殊に、メイナードおよびMaynardが先行研究で論じている学説は、後発の多くの研究者によって引用されており、その研究意義の大きさが伺える。本章では、日本語のあいづちを英語のそれと比較することによって、当該言語におけるあいづちの特徴を浮き彫りにしようとしている。

あいづちについては様々な観点で研究がされているが、本章では堀口(1977:77)によるあいづちの定義を採用している。同氏は「まだ明確で一致したものになっていないものの、話し手が発話権を行使している間に聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現という点で一致している」と論じている。あいづちには語彙的なものと非語彙的なものがあるが、本章では日英のあいづちを調査することから、あいづちをやや広く解釈して両方のあいづち表現を調査対象としている。それらに加えて、繰り返しと堀口(1997)の言う「先取りあいづち」も取り上げている。会話例(1)がアメリカ人による繰り返しの例、会話例(2)が日本語話者の先取りあいづちの例である(pp.171-172)。あいづちというのは話者に対する聞き手の反応であると評者は考えていたので、先取りあいづちという観点はなかなか斬新な発想であると感じた。下線部が該当する部分である。

会話例(1) アメリカ英語での繰り返し(p.171)

01 U11: Yeah, we have a good reason. But at the same time, I don't like him from the school as such. No schools, throughout the course of my life, schools never had like school spirit.

02 U9: School spirit.

会話例(2) 日本語会話での先取りあいづち(p.171)

01 J42: でも逆に 逆に遠いって言うか その新宿が始発だから絶対に座れるんで 【それはよかったなっていう】

02 J36: [なるほど]

03 J42: 帰りもまあ普通に座れるんです

会話例(2)では、J36 は J42 の「帰りもまあ普通に座れるんです」という発話を予測して、あいづちを打っている。例を示されてみると、確かにこれまで耳にしてきた日本語の日常会話の中にこのような例があったことを思い出す。

2-8 8章 話題展開スタイルの日・英対照分析—会話参加者はどのように話題の展開に貢献するのか—

本章では、「話題」の定義として日常会話等の分析に主眼を置いた Brown and Yule(1983)の topic framework を参考にしている。Topic framework とは、contextual framework(文脈の枠組み)であり、その文脈にそって話題が組み立てられていくものである。会話データのどこで文脈、つまり topic framework(以下、TF とする)が途切れ、次の文脈に移行したと判定すればいいのか。本研究では、メイナード(1993)ら話題転換などに関する先行研究を参考にし、以下の点を TF の転換点とした(p.198)。

- (1) ポーズの後で文脈が変化した箇所
- (2) 話し手の音調が変わった箇所
- (3) 文脈の転換を明示的に示す表現が使用された箇所(例: By the way)
- (4) 限られた反応の後

その文脈で話すことがなくなった場合、参加者が、先の話者の発話を繰り返したり、互いにあいづちだけを何度も打ち合ったり、笑いだけが起こったりする場合

次に、それぞれの TF の中で参加者がどのように話題へ関与しているか、会話データを質的に分析している。参加者の相互行為のあり方に基づいて、①interactive style, ②duet style, ③monologue style とカテゴリ化している。①は相手に情報を提供することを促しながら話題を展開するスタイルで、②は他者からの働きかけがなくても、自ら進んで情報や意見を提供していくこと、③は一つの TF の中で、一人が「話し手」となって話し続けるスタイルである。実験結果を見ると、3変種いずれの英語においても最もよく使われている話題展開のスタイルは、interactive style と duet style を組み合わせた混合スタイルである(英 79%、豪 60%、米 52%)。それに次いで interactive、duet のそれぞれが用いられるが、monologue style はほとんど用いられなかった。一方、日本語の会話は、英語の会話ほどスタイルに偏りがなく、どのスタイルも割と満遍なく用いられていた。特に、英語会話ではほとんど使用されていない monologue style が 22%使用されている。

2-9 9章 日・英・米・豪の母語会話および異文化間会話から見るターンと発話量

本章では、コミュニケーションの視点からターンと発話量に関する質的および量的分析調査を行っている。著者は

Clyne(1994)の理論を参照し、異文化間コミュニケーションで違いが顕著であるとされる3つのターンの種類を採用している。それらは奪い取りのターン(turn-appropriating)、質問のターン(turn-direction)と維持のターン(turn-maintaining)という分類である。話者 A が特定の誰かに質問を投げかけた時、それを投げかけられた参加者が次の話者となり、こういう場合を「質問のターン」とする。現話者 A がターンを維持したいにもかかわらず、話者 B が割り込みをし、結果的に話者 B がフロアを奪う場合のことを「奪い取りのターン」と呼ぶ。最後に、「維持のターン」は話者 A が他者からの発言があったにもかかわらず、自らのターンを維持し続けた時の維持されたターンのことを指す。なお、本章では他の話者の発話が起ころるまでを一つのターンとして数え、それが極めて短いものだとしても、他者からの発話があったところを現話者のターンの終わりとした。

分析結果の中で興味深かったのは、3変種の英語会話で用いられた平均ターン数と平均発話量が概ね同量であるという点である。以下がそれぞれの量をまとめた表である。

表1. 英米豪圏(各4会話)会話の平均ターン数と平均発話量 (p.238)

	ターン数	発話量 (語数)	平均発話語 数/1ター ン
イギリス	443	5,269	11.9
アメリカ	509	5,674	11.1
オーストラリア	497	5,467	11.0

日本語会話についてもこういったデータの分析をしたが、発話量は英語とはカウントの単位が異なるために比較することはできない。本章の著者は本研究において、日本語会話では英語圏の会話よりも約2倍ものターン数があると報告している。

表2. 日本語4会話の平均ターン数と平均発話量(p.239)

	ターン数	発話量	平均発話語 数/1ター ン
日本語	884	14,771	16.7

こういった発話傾向の相違について、著者は「英語圏の会話と比較してターン数の多いことが、日本語会話におけるやりとりの活発さを表すことにはならないが、少なくとも日本語会話でポーズが著しく長かったり、ひとりが演説調に長く話すのを他の人が黙って聞くことが多いということはなさそうである」と論じている(p.239)。

まとめの中で、3変種の英語圏については発話量やターン数という会話のリズムについて地域差はなかったが、ターンの種類である奪い取り(turn-appropriating)の発生回数に差

異が観察されたと報告している。イギリス英語では奪い取りが他の地域の会話より突出して多く出現していた一方、オーストラリア英語ではそれが少なく、イギリス英語の3分の1以下であった。著者はこの傾向について、「オーストラリア英語話者が奪い取りをしないのは、相手のネガティブ・フェイスを侵害する可能性があるからだ」と分析している。

2-10 10章 英語会話と日本語会話の構造

本書では第3章から第9章まで、初対面会話における英語会話と日本語会話の特徴を6つの観点—自己開示、応答要求表現と応答の連鎖、他者修復、あいづち、話題の展開スタイル、ターンと発話量—から分析した。本章では、これら6つの観点による分析結果を踏まえ、英語会話と日本語会話の構造と特徴を分析する。本書における総括的な章である。本章では上記6つの観点を「語用指標」と呼んでいる。著者はまず、英語会話と日本語会話それぞれにおける「話し手の役割」「聞き手の役割」「会話の構造」「会話の構造の背後に見える特徴」を説明している。それから英語会話と日本語会話を対照し、両者の類似点と相違点を指摘している。

また、英語会話と日本語会話では異なる話し方の決まりごと、すなわち「語用規則」も存在する。例えば4章でも論じられたように、初対面会話において英語話者は最初から自己を大いに開示して話を進めていくが、日本語話者は相手の様子を見ながら自己の情報を小出しにしていく。異文化間会話に参加する時、英語会話の語用規則を知らずに日本語会話の語用規則をそのまま使用すると、両言語の話者間にミスコミュニケーションを引き起こしてしまう。

2-11 11章 語用指標とその英語教育への応用

本章も第10章と同様に本書の総括的な章であるが、こちらは本書の中で扱った6つの観点を英語教育へ応用することについて語っている。母語を共有しない異文化間コミュニケーションにおいては、何が contextualization cue になるのか知っておくことが誤解の予防になると著者述べている。Contextualization cue とは Gumperz(1982)が提唱した用語で、ある言語文化内で共有されている前提のことを指す。

章の半ばから、具体的にどういった手法を用いて英語会話の指導をするべきかについて語られている。著者によると教育現場には明示的指導と暗示的指導がある。前者は語用規則を明示的に示してから会話指導に入るものであり、後者は予めそういうことはせずに、上手く構成された練習をさせることで、学習者が自然に語用規則に則った会話が展開できるようになる指導である。明示的指導の一例として、村田・大谷(2006)の英語のポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを明示的に示す手法が挙げられるが、このメソッドで教師は学生に様々なストラテジーを練習させる。以下が指導前と指導後の学生による会話例である。

会話例(3) ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの指導前 (p.283)

F1: What's your name?
 F2: My name is Kumi Hori.
 F1: When is your birthday?
 F2: My birthday is July 16th.
 F1: Where is your hometown?
 F2: My hometown is Nara.
 [以下省略]

会話例(4) ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの指導後 (太字はポジティブポライトネスに関わる部分)(p.284)

F6: Good morning, **Moe**.
 F5: Good morning, **Miki**.
 F6: How are you today?
 F5: Oh, I'm fine. How about you?
 F6: Uh, I'm fine, too. Thank you. **What, what will you do summer vacation?**
 F5: I want to go to sea.
 F6: Oh.
 F5: **And I, I will go to camp activity.**
 F6: **Oh, where are you going to? Where?**
 F5: Yamanakako. I want to, **I go to Yamanakako, in Yamanashi.**
 F6: Oh.
 [以下、省略]

二つの会話を比較すると、指導前の会話はまるで尋問形式だったのに、指導後には「相手に興味を示す」や「答に一言付け加える」といったストラテジーを用いるようになった。

3. 考察

第8章の序盤で語られている、著者の研究のきっかけとなったエピソードが興味深かった。とある非常に高い英語力を持つ日本人が、第1章でも述べた会話実験に参加した。収録後に行ったフォローアップ・インタビューによると、彼は英語の運用能力に問題がないのにもかかわらず、英語話者たちに悪い印象を与えていたのだ。彼らの言い分によると、英語話者が積極的に話題を展開する一方で、この彼はひたすら聞き役に徹していたということであるが、皮肉なことに彼自身は良かれと思ってそのような言語行動を取っていたのである。Otani(2007)によると、「この日本人参加者が相手に配慮して良かれと思って行った会話への参加の仕方は、英語母語話者には逆効果で、日本人の意図とは異なって解釈され、悪印象を与えてしまっていたのである」と述べている。評者自身も英語会話の場においてはこの日本人参加者のような言語行動を取る傾向があり、その根底には自分は英語のネイティブスピーカーではないのだから、積極的に会話に参加せずとも大目に見てもらえるだろうという甘えがある。しかしながらこのような態度はミスコミュニケーションの要因となるため、拙い英語ながらもなるべくたくさんの発言をする方が英会話

参加のストラテジーとしては正しいのである。

以下は評者による各章に対する意見の提示である。いくつかの章では総括の部分にある、分析結果の英語教育への応用についての記述が心持ち少ない気がした。本書は副題でデータ分析の英語教育への応用を謳っているのに、各章の担当者がもう少しその点に踏み込んでみてほしいだろう。英語教育への応用について多く言及したのは4章と8章の約2ページ分である。6章では英語教育への応用について直接触れる記述はなかった。

6章では英語の異文化話者間会話が日本語のそれよりも件数が多いので(両者の数が均等ではないので)、他者修復の出現データ件数が比較するにはいびつになってしまう。組の数を均一にするなどしてならした方がいいのではないだろうか。

また9章では、英語会話と比較すると日本語会話では一人が演説調に長く話すのを他人が黙って聞くことが多いということはなさそうであると論じられている。しかしながら、8章を読むと、一人の人間がターンを独占する *monologue style* が英語会話ではほとんど使用されない一方、日本語会話では22%用いられていると報告されている。研究の分析対象となる範囲が多少異なるとはいえ同じコーパスデータを使用しているのに、双方の主張に整合性がないように感じられる。

あと、些末なことかもしれないが、メイナードの著書「会話分析」が複数の章で取り上げられているが、8章の参考文献にある発行年が他の章に記載されているものと異なる。発行年は一年しか違わないのだが、これは改訂版が出されたということなのだろうかそれとも単なる誤りなのだろうか疑問に思った。

4. おわりに

日本人が英会話に上手く参加できないのは、文法重視でリスニングやスピーキングを軽視した英語教育のせいであると評者は考えていた。実は、英会話力を向上させるためには運用能力だけではなく、日本語と英語の「コミュニケーション・スタイル」の違いを把握することが重要なのである。各言語話者の間には暗黙のルールとなっている会話の決まり事があり、言語間でそのルールは異なる。本書では「自己開示」等6つの言語的観点を踏まえ、実際のデータを分析して「暗黙の決まりごと」を発見し、さらにはそれを英語教育に応用しようと試みている。

分析対象となった会話データは、日・英・米・豪の四か国の参加者によって構成され、会話の件数も多い。母語話者間の会話のみならず、英語と日本語それぞれの異文化間会話も収録している。量的にも質的にも充実した精度の高いデータ収集と分析なのではないだろうか。このような広範なデータを複数の言語学者たちが共有し、それぞれ異なる語用指標をテーマに分析をすることは、日・英語の対照研究ならびに英語教育にとって大きな意義がある。評者は英語教育者として、本書で提案されているコミュニケーション・スタイルの相違

を考慮に入れた教育方法を、英会話の実践教育において取り入れてみたい。

参考文献

- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』東京：くろしお出版
- 村田和代・大谷麻美(2006)「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの指導の試み」堀素子・津田早苗・大塚容子・村田泰美・重光油加・大谷麻美・村田和代『ポライトネスと英語教育』195-228. 東京：ひつじ書房
- 水谷信子(1993)「『共話』から『対話』へ」『日本語学』12巻4号:4-10. 東京：明治書院
- メイナード・K・泉子(1992)『会話分析』東京：くろしお出版
- 津田早苗他(2015)『日・英語談話スタイルの対照研究：英語コミュニケーション教育への応用』東京：ひつじ書房
- Brown, G. and Yule, G. (1983) *Discourse analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Canale, M. and Swain, M. (1980) *Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing*. *Applied Linguistics*, 1(1), 1-47.
- Clyne, M. (1994) *Inter-cultural communication at work*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gumpertz, J. J. (1982) *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hall, E. T. (1976) *Beyond culture*. New York: Anchor Books.
- Hall, E. T. (1983) *The dance of life: The other dimension of time*. New York: Anchor Books.
- Hayashi, M., and Hayano, K. (2013) Proffering insertable elements: A study of other-initiated repair in Japanese. In Hayashi, M., Raymond, G. and Sidnell, J. (Eds.), *Conversational repair and human understanding*, 343-380. Cambridge: Cambridge University Press.
- Maynard, S. K. (1997) *Japanese communication: language and thought in context*. Hawaii: University of Hawaii Press.
- Otani, M. (2007) Topic shift by Japanese and Americans: A cause of misinterpretation in intercultural communication. *Memoirs of Nara University*, 35: 69-83.
- Ozaki, A. (1989) *Requests for clarification in conversation between Japanese and non-Japanese* *Pacific Linguistics. Series B-102*. Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies. Canberra: Australian National University.
- Jourard, S. M. (1971) *Self-discourse: An experimental analysis of the transparent self*. New York: Wiley Interscience.
- Svartvick, J. and Leech, G. (2006) *English: one tongue*,

many voices. New York: Palgrave Macmillan.

Yamada, H. (2002) *Different games, different rules: why Americans and Japanese misunderstand each other*.

Oxford: Oxford University Press.